イ読書

目利きが選ぶ今週の3冊

（★★★★★これを読まなくては損をする、★★★★読みごたえたっぷり、お薦め
★★★読みごたえあり、★★価格の価値はあり、★話題作だが、ピンとこなかった）

竹内薫
サイエンス作家

金持ち脳と貧乏脳
茂木健一郎著

★★★★★

（総合法令出版・1300円）

おもちゃと遊びのコンシェルジュ
関康子著

★★★★

親子で生活を楽しむためのおもちゃ100点が、写真とエッセイを交えて紹介される。子供の心の成長を支えてくれるおもちゃと遊びの数々は感動を与えてくれる。（ADP・1700円）

確率のエッセンス
岩沢宏和著

★★★

確率は直感に反することが多い。でも、確率的な思考ができないと、人生、損ばかりしてしまう。楽しく問題を解きながら、確率に強くなれる、絶好の入門書。（技術評論社・1580円）

井上章一
風俗史家

真実に悔いなし
古田武彦著

★★★

邪馬壹国論で知られる歴史家の自伝。専門の学界は、彼の仕事を徹底的に黙殺した。理にかなう仕事も、たくさんあったのに。学者村の陰湿ぶりを、思い知る。（ミネルヴァ書房・3000円）

歴史をつかむ技法
山本博文著

★★★

歴史は暗記物じゃあない。社会理論におさまりきりもしない。証拠となる史料をつうじた法廷であるという。バランスのとれた判決を考えるところに、歴史の醍醐味を見る。（新潮新書・760円）

歴史の読み解き方
磯田道史著

（朝日新書・760円）

★★★★

北上次郎
文芸評論家

純喫茶トルンカ
八木沢里志著

★★★

東京下町の喫茶店を舞台にした連作集。人と人のつながりをやさしく丁寧に描くというのは常套でも、キャラクターの造形がうまいので最後まで読まされてしまう。（徳間文庫・620円）

ハードトーク
松原耕二著

（新潮社・1700円）

★★★★

あなたの人生、片づけます
垣谷美雨著

★★★

部屋を片づけるプロの指示にしたがって整理してみると、あらあら不思議。気持ちも暮らしも、そして人生も、すべてがすっきりとしてくるという連作集。（双葉社・1500円）

金持ち脳と貧乏脳

お金と賢く付き合うには

この本は、題名から想像されるような、いわゆるハウツー本ではない。

著者は脳科学の視点から、人間とお金の関係を鋭く分析する。お金を儲けると、脳内の化学物質が「報酬」を出すので幸せになれる。お金を儲けて、買い物をしたり、寄付をしたり、社員に給料を払ったりすると、社会から尊敬され、頼りにされ、安定度が増す。

でも、お金を儲ければそれでいいのかといえば、そんなことはない。年収1千万円までは、収入が増えるにつれて幸福度が増すが、1千万円を超すと、仕事のストレスなどが増え、逆に幸福度が下がってしまう。

お金は「安全基地」なので、貯蓄が増えると精神的にも安定し、新たな挑戦をする余裕が生まれる。でも、お金だけに頼っている人は、お金の切れ目が縁の切れ目なので、常に不安を抱えている。

著者は脳科学者であるとともに、ベストセラー作家でもあり、テレビに出演し、世界的な学者や芸術家たちと交流があり、億万長者の友人も多い。この本は、そんな著者の幅広い人間観察から生まれたのだろう。

お金との賢いつきあい方を伝授してくれる、人生指南の書。（竹内薫）

ハードトーク

インタビュー巡る人間ドラマ

ディック・フランシスがデビューしたとき、どうして競馬の騎手にこんな素晴らしい小説が書けるのか、とイギリスの読者は驚いたという。その後は、作家の才能を持つ人間がたまたま競馬の騎手だったのだと思うようになったらしいが、本書にもそれと同じことが言えそうだ。

本書の著者は、著名なTVキャスターである。ディック・フランシスが自分の仕事の場であった競馬界を小説の舞台に選んだように、著者もまた熟知しているTV界を舞台にしている。

素晴らしいのは、派手な事件を作らず、ケレンも避け、ひたすら人の心の襞を描いていくことだ。派手な道具立てを用意したほうが小説は簡単なのに、そういう安易な道を選ばない節度がよし。モチーフは、インタビューとは何かだ。

人物造形にやや脆弱な部分を残していることを指摘する向きもあるかもしれないが、なぁに気にすることはない。志の高さが足りない技術を補ってくれる。それにここまで読ませてくれれば充分だろう。特にラストのインタビュー・シーンが秀逸。サブで泣く姫と一緒に、ここで我々もまた目頭を熱くするのだ。（北上次郎）

歴史の読み解き方

今に生きる江戸 最新研究から

ひところ、国民文化の創造に光をあてた歴史分析が、たくさんでた。明治維新政府が、一国の独立を勝ちとるべく、人々に国民としての自覚をうえつける。この過程をつうじてすりこまれた考えが、現代人をしばっている。そんな論法を、これらの分析はとってきた。

そういった読みときに、著者があらがっているわけではない。しかし、国民文化論ではぬけおちてしまう歴史の筋道を、この本は多くひろいあげている。とりわけ官僚機構の体質、訴訟のあり方などは、江戸期以来のそれに由来するという。

江戸時代の税は、主として米にかけられた。商業活動は、ほとんど課税対象になっていない。農業に軸をおくこのしくみこそが、人々を税金のかからない商業へとかりたてた。著者は、江戸の経済史をそう位置づける。目のさめるような指摘である。幕末におけるブルジョワジーの発達を、新しい角度から教えてもらうことができた。

日本の各地、各藩でこなる諸事情への目くばりも、ありがたい。目新しい史料も、たくさんほりおこしている。そして、それらをことごとくひけらかさず、かくし味として活かす筆法にも脱帽した。（井上章一）

読書日記

『成りあがり』
熱い言葉が俺を変えた

漫画家
板垣　恵介 ①

いま、矢沢永吉さんの『成りあがり』（角川文庫）を久々に本棚から抜き出し、感慨を持ちながら読んでいる。

漫画家になる前、俺が習志野の空挺部隊にいたことは、作品の読者ならご存じだと思う。正式名を陸上自衛隊第一空挺団といい、輸送機で敵軍の後方にパラシュート降下し、敵軍大隊を少数で攪乱することを目的とする精鋭が集められている。

俺はそこで十九歳から二十四歳まで過酷な訓練生活を過ごした。自他共に「精鋭無比」とまで呼ばれる部隊に所属する自分を誇らしく日常を送っていた。そんな時、都内に住む友人が貸してくれたのが『成りあがり』だった。

帰りの電車内で頁を開くと、そこには衝撃の言葉が熱く綴られていた。俺は電車を降りた後も水銀灯の下に座り込んで貪るように読み耽った。

新鮮だった。成功者たちは何故か金を手にすると「人生は金じゃない」と言ってしまう。しかし矢沢さんは堂々と「イッツマネー！成りあがれ！成功しろ！」とまくしたてていた。

初めて、国に保護られる自分を恥ずかしく思えた。この本との出会いが、俺の人生を変えた。来週から、俺が漫画家として〝成りあがる〟道程で出会い、いまも眼の前の本棚に並んでいる背表紙の汚れた本を順に紹介したい。